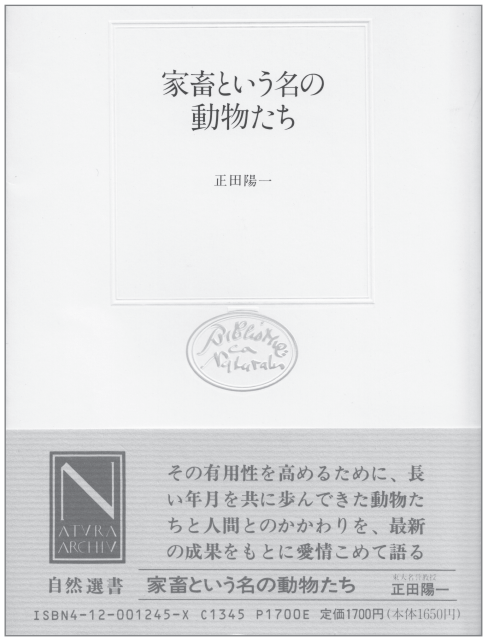
古今東西、数ある動物・動物園水族館関係の本の中から、編集部が動物園水族館に関心を持つすべての人に読んでもらいたい一冊を選びゲストに書評をお願いしました。そしてさらにゲストご自身の著書を一冊ご紹介いただきます。

ゲスト:正田陽一先生(東京大学名誉教授)

上野動物園には、「動物園ホール」が最近までありました。その2階の資料閲覧室に行けば、資料の本を調べ、読んでいる正田先生にお会いすることが出来たのです。先生の手提げ袋には、たいてい何冊かの本が入っています。いつも本を身近にしている方が本を書かれると素敵な本ができます。また、ご自身の身近な話題から書評をしていただけることでしょう。



「家畜という名の動物たち」

正田陽一著

(1983/11/25)　中央公論社　定価1500円

自分の本のことを言うのは気がひけるが、この本には愛着がある。東京大学の助教授をしていた時代、縄のれんの一杯飲み屋で中央公論の編集者と同席していて、日本の在来家畜の保護の話をしたところ、雑誌『自然』に家畜の話を書かないかと誘われて、連載が始まった。それをまとめたのが本書で、私の初めての単著となった。

この連載のおかげで書くことがおもしろくなり、家畜のことを一般の読者にも伝える大切さを感じるようになった。家畜は、遺伝子操作とは言えないまでも自然の状態を捻じ曲げて、人間が作ったものだ。日本の家畜のあり方は、このままではいけないという想いを持つようになり、従来からおこなってきた牛や馬に農耕をさせ、糞を土地に撒き、土に力を与える有畜農業を勧めることを頭に描きなら本書を書き進めた。図書館などで、今一度、手に取っていただけると嬉しい。

「日本の水族館」

内田詮三/荒井一利/西田清徳著

(2014/8/8)　東京大学出版会　本体価格3600円+税

「動物園に行ってきた」と言うと失笑されることがあるが、「水族館に行ってきた」と言っても笑う人はいない。どうも動物園は水族館の一段下に見られ、『おとなの行くところではない』と思われているようだ。動物園に頻繁に通っている身にしてみれば、少し肩身が狭い。しかし、別の見方をすれば、水族館は知性的で、社会の評判が高いことを現しているとも考えられる。

動物園は、『楽しみ』が先行して、エンタテイメントが目立っているところがある。一方の水族館は設立当初から研究施設としての機能があった。博物館的な要素を持っていると言ってもいいだろう。『日本の水族館』は、その日本の水族館で研究と実践をしてきた皆さんが、それぞれの専門分野を書かれており、分担執筆の良さが出ている一冊だ。日本で生まれ育ってきた水族館の現在を知るには、最適な本と言える。